

キリスト教の授業って、な～に!?

青山学院では、中等部、高等部は「聖書科」、初等部は「宗教」、大学は「キリスト教概論」という名称で、キリスト教の授業が行われています。同じキリスト教の授業といっても、それぞれにどんなことを学習しているのでしょうか。今回は、初等部宗教主任の小澤淳一先生の4年生の授業にお邪魔しました。

授業のねらい

4年生2学期は、パウロの生涯を学ぶことから始まりました。パウロは、復活のイエスに出会うことで回心し、伝道者となってたくさんの教会をつくり、新約聖書に残された多くの手紙を書いています。「イエス様に出会う」ということが、パウロの人生を180度転換させ、イエス様に従って生きる人生へと変えられていったのです。それは現代に生きる私たちにとっても同じです。2学期のねらいは、自分たちはどのような

に「イエス様と出会う」ことができるか、について考えるようになることです。それを考える教材として一つの映画が用いられました。

教材『四人目の賢者』

初等部の子どもたちは毎年、クリスマス讃美礼拝を守りますので、三人の博士のことをよく知っています。しかし、マタイによる福音書2章をよく読んでみても「三人」とはどこにも書いてありません。生まれたてのイエス様に黄金、乳香、没薬の3つの贈り物をしたことから三人の博士がいたということを確認します。

そこで、授業では映画『四人目の賢者』を観ました。この物語は、アメリカの牧師ヘンリー・ヴェンダイクが1902年に書いた『もう一人の博士』を映画化したものです。この物語は、聖書に登場する三人の博士と待ち合わせをしていた主人公アルタンが運命を辿り、三人は待ちきれずに先に出発

してしまいます。そして、聖書に記録されているように、誕生した救い主イエス・キリストに贈り物を献げます。後を追うことになったアルタンは、奴隷のオロンデスを伴ってイスラエルに向かいました。

まず、イエス様たちがすでに出発してしまったベツレヘムの場面が出てきます。ここで一行はヘロデの「2歳以下の男の子の大量虐殺」に遭遇してしまいます。そして、その時殺されそうになった男の子を助けるために、本当はイエス様への贈り物にするはずだった宝石の中からルビーを兵士に賄賂として渡します。そうするうちに、ヨセフとマリアとイエス様はエジプトに逃げたという噂を聞き、アルタンたちも後を追います。アルタンは新しい王様が誕生したということで、高貴な場所を中心に探していました。しかし、エジプトのフナゴージ(ユダヤ教の礼拝所)のラビ(教師)から、「新しい王は貧しい人たちの中にいるのではないか」とアドヴァイスを受けます。そこで、エルサレムに戻り、スラムに身を寄せます。そこで数十年の時が経ちました。

エルサレムではシロの葉を手に、「ホサナ!」という声が響いています。救い主イエス・キリストの勝利の入城です。アルタンたちは、最後に残った贈り物の真珠を携えてイエス様の所に向かうのです。しかし、イエス様はすでにイスカリオテのユダの裏切りによってローマ兵に逮捕され、裁判にかけられて、ゴルゴタの丘へ向い、十字架の上で殺されてしまいます。一足遅いでアルタンはイエス様に会うことができず、すべての望みを失っていました。しかし、そこに復活のイエスが現れるのです。

復活のイエス様にアルタンは、「イエス様、私はあなたに何もすることができませんでした。」と告白します。しかし、イエス様は、「小さい者の一人にしてくれたことは、私にとってくれたことなのです」と言われました。アルタンは、自分はずでにイエス様にお会いしていたと確信し、息を引き取るのです。



気づき

最後に、先生から子どもたちに「アルタンは、イエス様に会うことができたのだろうか」という質問が投げかけられました。ある児童は「イエス様には会えなかった」と答え、また、別の児童は「生きているときはイエス様に会えなかった」と答えました。すると、さらに、それらに対し、「でもイエス様は復活されたのだから、今も生きているでしょ」と言う児童も出てきました。そこで、みんなが、「復活のイエス様に会うことができる」ということに気づくことができました。

その後、児童たちは、最後の言葉「小さい者の一人にしてくれたことは、私にとってくれたことなのである」という言葉が聖書のどこかに書いてあったと探し始め、そして、マタイによる福音書25章40節の御言葉を見つけて、口々に読み始めました。また、これは『くつやのマルチン』のお話に似ているということに気づく児童もいました。

まとめ

「私たちが復活のイエス様にお会いできる。」そのために自分はどうしたらよいのか。それぞれがその答えを自分の人生の中で探し、実践するための種が授業の中で播かれている、そのことが実感できる授業でした。



あの方は死者の中から復活された。
そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。
そこでお目にかかれる。 マタイ 28:7

宗教改革500年記念 聖書展

大島 力
学院宗教部長



昨年(2017年)は、ルターの宗教改革から500年の記念の年であった。10月31日が宗教改革記念日なので、その日に向けて10月18日から11月1日まで、ガウチャー記念礼拝堂のエントランスホールにおいて聖書展が行われた。これは、銀座にある聖書協会聖書図書館が閉じられ、その蔵書聖書が青山学院大学に寄贈・移管される予定になっていることが一つの契機となり、行われたものであった。

期間中には、約1400名の来会者があり、展示された40点以上の聖書を、学内外の人々が熱心に見入る姿は印象的であった。この聖書展では、紀元1世紀前後、つまりイエスの時代の「死海写本」から始まり、4世紀の「パチカン写本」、11世紀の旧約聖書の底本(レニングラード写本)、15世紀の「グーテンベルク42行」聖書、16世紀の「ルター訳聖書」、17世紀の「ジェームズ王欽定訳聖書」など、ヨーロッパを中心とした聖書翻訳の歴史を一覧できた。

他方、現存する最古の和訳聖書であるギョツラフ訳のヨハネ福音書も展示された。冒頭の「初めに言があった」という部分は「ハジマリニ カシコイモノコザル」と



訳されており、そのカタカナをはっきりと読み取ることができた。「言」の原語はギリシア語の「ロゴス」であるが、これは知恵の源、あるいは世界の原点を示している。それが「カシコイモノ」と訳され、イエス・キリストの存在が1837年にすでに口語訳として紹介されていたことには、心が躍る思いがする。

また、青山学院が聖書翻訳と深い関わり合いをもっていることを知る展示内容であった。例えば、本学の元教授であった別所梅之助は、「山べにむかいわれ目をあく」(讃美歌301番)の作詞で有名であるが、聖書翻訳においても重要な働きをしたのである。特に、明治の文語訳聖書を大正時代に改訳する際には、その翻訳委員になり、改訳の稿本や試刷り(『マルコ福音書』1911年)を保存していた。それは現在、本学の資料センターに貴重な資料として保管されている。

このようにマルティン・ルターから始まった、市民・庶民の心に届く「生きた言葉」で聖書を翻訳しようとする試みは、現在の青山学院にまで達しているのである。そして、それは本年末に発行予定の「聖書 聖書協会共同訳」として具体化されようとしている。



わたなべ けん
高等部部長

塩としてのサーバントリーダー

青山学院は創立150周年に向けて AOYAMA VISIONを掲げ、サーバントリーダーの育成に取り組んでいます。でも、「そもそもサーバントリーダーってどんな人?」と思う人は多いでしょう。そこで、今回は高等部の渡辺健先生に、先生が考えるサーバントリーダー像について寄稿していただきました。

は、互いに仕え合いながら世の中に良い味付けを施し、荒廃を防ぐ善き「塩」となるように期待されているのです。

では、善き塩とはどうあればよいのでしょうか。減塩が叫ばれる時代もありますが、やはり塩は控え目がいいのでしょう。塩味にしたい、つまり誰かを従えたい、という思いを退け、その食材(相手あるいはグループ)を引き立たせる塩加減を目指すのです。食材が最高の味を引き出された時、その塩こそが善き「塩」と呼ばれるのだと思います。私たちの謙虚な言葉がけや行動が、食材をよい方向へ導くことになるでしょう。

また、塩が働いた時、実はその料理も塩自身の旨みをも引き出し、相互に最善のものとしての気がします。聖書によると、神は私たち一人ひとりに違う賜物を授け、それが互いに仕え合うことによって一つの体を造り上げ、成長していく、とあります。ということは、誰か特定の人だけが善き塩だということではなく、それぞれが違う場面で、善き塩であり、善きサーバントリーダーであり得る、と言うことができそうです。私たちはそれぞれがそれぞれの賜物を生かして仕え合うときに、その相手やグループをよい方向へ導くだけでなく、結果的に自身の賜物も生かされるよう神に造られている存在なのです。

どうか。私たちの掲げる「サーバントリーダー」は、リーダーになろうと意気込まずとも良さそうです。塩のように、ただその時々において食材の味を引き立たせるため、あるいは食材が腐らないように、時には励まし、時には助言をし、陰と日向日となって働くなど、できることをすることによって、それが自然と全体を良い方向に導く、ということになるのではないのでしょうか。従おうとする者に万事を益とてくださる神に信頼して「地の塩」として、人に仕え、控え目なサーバントリーダーであることに味を占めたいものです。

WESLEY HALL NEWS

126TH EDITION MARCH 1, 2018

シリーズ 折り

Prayer of Saint Francis

Lord, make me an instrument of your peace.
Where there is hatred, let me sow love;
Where there is injury, pardon;
Where there is discord, unity;
Where there is doubt, faith;
Where there is error, truth;
Where there is despair, hope;
Where there is darkness, light;
And where there is sadness, joy.
O divine master, grant that I may not so much seek to be consoled, as to console;
to be understood as to understand;
To be loved as to love.
For it is in giving that we receive.
it is in pardoning that we are pardoned,
And it's in dying that we are born to eternal life.
Amen.

聖フランチェスコの祈り

主よ、わたしを平和の器とさせてください。
憎しみがあるところに愛を、 争いがあるところに赦しを、
分裂があるところに一致を、 疑いのあるところに信仰を、
誤りがあるところに真理を、 絶望があるところに希望を、
闇あるところに光を、 悲しみあるところに喜びを。
ああ、主よ、慰められるよりも慰める者としてください。
理解されるよりも理解する者に、 愛されるよりも愛する者に。
それは、わたしたちが、自ら与えることによって受け、
許すことによって赦され、
自分のからだをささげず死ねることによって
とこしえの命を得ることができるからです。

アーメン

この匿名の祈りは、13世紀の聖フランチェスコの精神をよく表現していると言われています。この祈りは平和の祈りとして、20世紀に世界中に知られるようになりました。複数のバージョンがあり、多くの言語に翻訳されています。ここには私心のない精神と隣人愛が美しく表現されています。心の広い言葉は、キリスト教信者以外の方々からも高く評価されています。

(大学宗教主任 ジュースト ポール)

編集後記

3月に入り、卒業シーズンが近づいてきました。幼稚園児から大学院生まで青山学院を学び舎として、初めて聖書を聞き、父なる神様と出会う方も多かったことでしょう。ますます派手な社会において、無条件で絶対的に自分を愛してくださる神様の豊かなめぐみによって、ひとり一人が平和を作る人になってほしいと願います。季節は春、また新しい一歩を踏み出しましょう。

(中等部教諭 林 謙二)

Wesley Hall News 第126号
2018年3月1日発行

発行 青山学院宗教センター 学院宗教部長 大島 力
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537(ダイヤルイン)
(URL)http://www.aoyamagakuin.jp/center/index.html
(E-mail)agcac@aoyamagakuin.jp
編集 青山学院ホールニュース編集委員会
印刷 株式会社 万全社



表紙写真
幼稚園(年長組)の礼拝の様子

